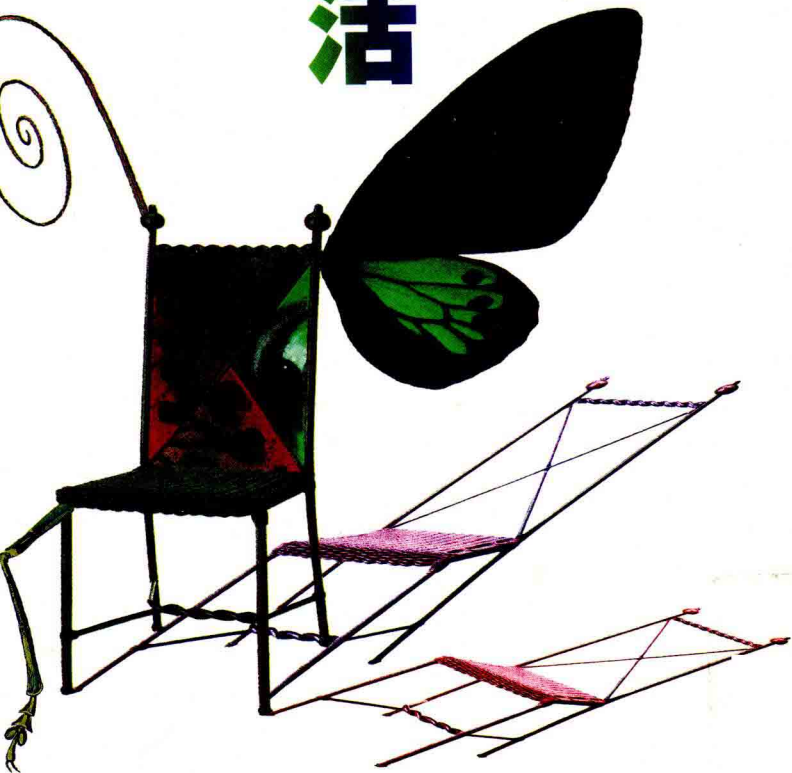


ヴィクトル・ペレーグイン
吉原深和子訳

虫の生活

ЖИЗНЬ
НАСЕКОМЫХ



群像社

群像社ライブラリー 5

虫の生活

1997年11月20日 初版第1刷発行

著 者 ヴィクトル・ペレーヴィン

訳 者 吉原深和子

発行者 宮澤俊一

発行所 株式会社 群 像 社

東京都千代田区猿樂町2-3-1 〒101

電話 03-3291-6153 振替 00140-8-95943

印刷・製本 平文社

装 丁 寺尾眞紀

万一落丁乱丁の場合は送料小社負担でお取り替えいたします。

Пелевин, Виктор

ЖИЗНЬ НАСЕКОМЫХ

Pelevin, Viktor

JIZN' NASEKOMYKH

© Editions du Seuil, 1995

Japanese translation copyright © by Yoshihara Miwako

ISBN4-905821-44-4 C0397

江苏工业学院图书馆

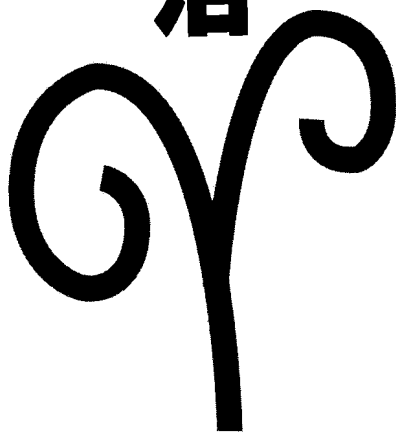
JK3H5 H-CEKONIK

藏书章

虫の生活

ЖИЗНЬ
НАСЕКОМЫХ

トル・ペレーグイン
和子訳



目次

1	ロシアの森	9
2	イニシエーション	30
3	生きるために生きる	48
4	蛾の走光性	63
5	第三のローマ	80
6	この命、王に捧ぐ	97
7	マルクス・アウレリウスによせて	
8	虫殺し	126

109

9 黒い騎士 145

10 敵の巣の上を飛ぶ 167

11 井戸 184

12 パラダイス
PARADISE 197

13 若き母親の三つの想い 215

14 第二世界 235

エントモピローグ 251

解説 259

虫の生活

私は庭にいる。灯火が燃えている。

恋人も、召使も、知り合いもない。

この世の弱き者、強き者の代わりに――
あるのはただ調和した虫の声。

ヨシフ・プロツキイ*

1 ロシアの森

ポプラと糸杉の古木になかばおおわれたホテルの本館はまるでイワンの馬鹿の号令ひとつでくりと海に背を向けてしまったような、陰気な灰色の建物だった。円柱が立ち並び、ひびの入った星形と、石膏の風に永遠になびいた麦束のレリーフのある正面は、炊事場と洗濯場と理容室の匂いのまざりあった狭苦しい中庭に面していたのに、海岸通りのほうは二つか三つ窓があるだけの素っ気ない壁になっていたのである。柱廊のむかい側、数メートルのところにコンクリートの塀がそびえ立ち、その塀にそって遠くにのびている集中暖房センターのパイプが夕日を浴びて時折かすかに輝いていた。円柱に支えられた巨大なバルコニー（というよりむしろテラス）の影に隠れた壮麗な高い扉はかなり前から閉めきりになっていたので、合わせ目のすきまも何度か塗りがさねたペンキでふさがれていたし、中庭もふだんは閑散としていた——たまにフェオドシアからミルクとパンを運んでくるトラックがそろそろと入ってくるくらいのものであった。

*プロツキイ（一九四〇—一九九六）の詩「ローマの友への手紙」（一九七二）の一節。（訳注、以下同）

しかしこの日の中庭はそのトラックもなかったので、バルコニーのレリーフのある手すりに肘をついた男の姿は、もしかすると空にふたつ白い点となって浮かんでいるパトロール中のかもめが見ていたかもしれないが、そうでなければだれの目にも入らなかった。男は下を見て、右手の、屋根の下からじょうご型の拡声器がのぞいているポート置き場の小屋をながめた。海がざわめいていたが、風がホテルの方角に吹きはじめると、人気のない浜辺に向けられたラジオ放送がとぎれとぎれに聞こえてきた。

「けっして同じではない、同じ型紙で裁断されたものではないのです……」

「私たちをたがい異なるものとしてお創りになりました——これは人間のその場かぎりのプランとは異なった、あまたのことを考慮に入れた偉大なる計画の一部ではないでしょうか……」

「神は私たちに何を求めておられるのか。神は、私たちがその恵みになつた行いをとることを望まれつつ、私たちを御覧になつておられます」

「神より賜った魂がどのようにその真価をあらわすのか、みずからも御存知ないのです……」

オルガンの響きが聞こえてきた。ときおり訳の分からぬ「ウムプス・ウムプス」で中断されはしたが、実に荘厳なメロディーだった。とはいえ、とくに聞き惚れるというわけにはいかなかった。演奏はほんのちよつとの間で、ふたたびアナウンサーの声に代わつたからである。

「お聞きの放送は、ソビエトのラジオ放送むけにアメリカの慈善団体『バビロンの河』の依頼により特別に制作されたラジオ・シリーズ……毎週日曜……アメリカ合衆国アイダホ州プリス『神の声』係までお寄せください」

拡声器の音が止み、男は人さし指を折るしぐさをした。

「ははあ」と彼がつぶやいた。「今日は日曜か。つまりはダンスがあるわけだ」

見るからに男は奇妙だった。あたたかい夕暮れなのに、グレーの三揃いを着込んで烏打帽をかぶり、ネクタイを締めている（下のほうに立っている、銀色の胸の部分までブドウの蔓のからまった南国のレーニンの小像とほとんど同じ格好だった）。なのに全体の様子からして暑さにうだっている風はなかったし、気分は上々らしかった。ただときおり時計に目をやってあたりを見まわしては、何やらぶつぶつぶやいていた。

拡声器から数分間むなしい砂あらしの音が流れ、ついでウクライナ語が物思わしげに語りはじめた。男はふと背後に足音を耳にして振りむいた。バルコニーを二人の男がやって来る。前を来るのは、白い半ズボンにまだら模様のランニングシャツがたの背の低い太った男。後から来るのは、パナマ帽をかぶり、薄手のシャツに淡いベージュのズボンを身につけた外国人で、手には流線形の大きなケースを持っている。異国人であることは、服装よりむしろ簡単に壊れてしまいそうな細い黒縁の眼鏡と、独特なナボコフ的ニュアンスのある優雅な日焼けあとからすぐにわかった。向こう岸^{*}でしか、そんな日焼けはしないものだ。

烏打帽の男が腕時計を指さして、太つちよにむかつて拳骨をふりあげると、それに答えて太つちよが叫んだ。

^{*} 亡命した作家ナボコフ（一八九九—一九七七）が書いたロシア時代の回想記は『向こう岸』（一九五四）という題名である。

「すすんでるんだよ！ てんで狂ってるのさ！」

二人は歩みよると、抱きあった。

「よう元氣か、アーノルド」

「おう、アルチュール。紹介しますよ」と太つちよが外国人のほうをむいて、「彼がアルチュールです。お話した男ですよ。こちらはサミュエル・サツカーさん。ロシア語を話されるんだ」

「サムでけっこう」手をさしだして外国人が言った。

「はじめまして」とアルチュールが言った。「サム、道中いかがでした？」

「ありがとう」とサムが答えた。「なにごともなく。で、あなたがたはいかがです？」

「なにかもいつも通りです」とアルチュールが言った。「モスクワの状況をご想像になれますか、サム？ まあ、似たようなもんです、ヘモグロビンとブドウ糖が少々多めですが。それにむろんピタミンも——まあ餌がいいですからね、果物がありますし、ブドウとか」

「それに」とアーノルドがつけたした。「聞いた話では、あなたがたのいる西側では、いろんな虫除けや殺虫剤でかんたんに窒息死しちゃうそうじゃないですか。その点、ここの包装材料はエコロジの面では完璧に清潔ですから」

「では、衛生面では？」

「なんですって？」

「衛生的なんですか？ 皮膚のことですよね？」とサムが言った。

アーノルドは少々うろたえた。

「ええまあ」アルチュールが気まずい沈黙を破って言った。「こちらには当然いらっしゃるのです?」「三日か四日のつもりです」とサムが答えた。

「しかしその日数で、マーケティングが終わりますか」

「『マーケティング』という言葉を使うつもりはないんですが。感触を見ただけです。この地でわれわれがビジネスを進めることがどれだけ合理的か、一般的見解というやつをまとめたんです」

「そいつはすばらしい」とアルチュールが言った。「いくつか十分にお見せできるような物件に目をつけておいたんです。で、思いますに明日の朝にでも……」

「とんでもない」とサムが言った。「ポチヨムキンの村じやあないんですから。足の向くまま、というのが好みでして。変に思われるかもしれないが、状況を把握するにはそれが一番なんです。それに明日の朝でなく、いますぐ出かけましょう」

「なんですって?」アルチュールはあきれかえった。「一服もせず? 到着を祝つての乾杯は?」

「ほんとに」とアーノルドが言った。「明日になさったほうがいいですって。それにわれわれが案内しますよ。さもないと偏見を持つことになりますからね」

「かりに私が偏見を抱いたとしても、あなたがたにそれを直していただく時間は十分にあるはずですよ」とサムは答えた。

*クリミア地方を治めていた龍臣ポチヨムキンはエカテリーナ女帝の視察に際して民衆の窮状を隠すために管轄下の村落を舞台用の書き割りで飾った。

彼はいかにもスポーツマンらしい危なげのない動作でバルコニーの手すりによじのぼると、足をぶらぶらさせた格好で腰を下ろした。残る二人はそれを押しとどめるどころか、みずから手すりによじのぼった。アルチュールは難なくやつてのけたが、アーノルドは二度試みてようやく成功し、しかも前の二人と違って、まるで高きで目がまわるのを避けるように、中庭に背を向けた格好である。

「行きますよ」そう言うなりサムは跳びおりた。

その後をアルチュールが物も言わずに跳びおりた。ふたりに遅れまいと、アーノルドは深く息をすると、ボートの縁から海へあおむけに飛びこむダイバーよろしく背中からおっこちた。

この場に目撃者がいたならば、見るも無惨な三つの遺体を目にすべく、手すりから身をのりだしてみにちがいない。しかしそこに彼が見いだすものは、いくつかの小さな水たまりと、煙草『プリモールスキイ』のぺちゃんこになった空き箱と、アスファルトのひびわれ、それだけなのだ。

しかしもし彼が超人的な鋭い視覚の持ち主ならば、遠く木立の影に隠れた町のほうに飛んでいく三匹の蚊を目にするにちがいない。

この想像上の目撃者は何を感じ、どんな行動をとるだろうか——いく久しくびったりと釘づけにされてきたテラスから唯一通じている錆びついた非常階段を、ぼう然としたまま降りていくのか、あるいは——こんなこと分かるものか——みずからの魂にかつてない未知なる感情を感じとり、灰色の石の手すりに腰かけて、三人の話し相手のあとを追っておっこちるのか。分らない。いや、

そもそも実際には存在しないくせに、超人的な鋭い視覚を持つ人物の行動なんて、だれにも分かりはしないだろう。

サムはホテルの壁から数メートル飛んだところで、連れのふたりを振りかえった。アルチュールとアーノルドは、かつてアレクサンドル・ブロークの涙をさそった『きみの灰色のあばら屋はぼくに』のような色をした小ぶりの蚊に変身していた。いまでは二人は、日中に熱せられた地面から立ち昇るかげろくに揺れながら、漠然と嫉妬するようなまなざしで連れを眺めていた。

サム・サツカーは口腔器官の不都合なつくりのおかげで、どうにか気障な渋面をつくらずにすんでいた。彼の姿は二人とまったく違っていた。チョコレートのような焦げ茶色、すらりと伸びた長い脚、引きしまった腹部とすばやく飛びたてるように斜めうしろに引いた羽根。変身したアルチュールとアーノルドの顔の先端が、巨大な注射器の針ともジェット戦闘機の機首についた速度計ともつかないずんぐりしたピンだとするならば、サムの口唇はエレガントに伸びた六本の細くしなやかな新芽であり、その真ん中から長く鋭い口吻が突きだしていた——要するに、そう、ロシアのありふれた二匹の虫を脇に控えたハマダラ蚊といった図なのである。おまけにアルチュールとアーノルドが何やら女の子が平泳ぎするみたいになよなよ飛んでいくのにたいして、サムの羽根の動きはむしろバタフライを思わせるもので、はるかにスピードがあつたので、二人を待つて空中で停止していなければならなかった。

みんな黙って飛んでいた。サムは自分の高度な飛行術をときおり陰気な顔をして眺めているアル